

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

時事性と民族誌、そしてメラネシア問題へのアプローチ：共同研究：

オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究（2009-2012）

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2015-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 丹羽, 典生<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10502/5519">http://hdl.handle.net/10502/5519</a>                   |

共同研究 ● オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究（2009-2012）



コキの部族間闘争（2011年4月、パプアニューギニア、岩本洋光撮影）。

## 紛争をどう扱うか、あるいは民族誌とメディア情報

本共同研究は紛争を人類学から扱うことを主題としているが、紛争にはむしろ政治学、国際関係論など、確立した学問分野が存在している。眼前の現象を記述・観察・分析するという技法に人類学の特色があるとはいえるかもしれないが、フィールドワークが人類学の専売特許ではなくなって久しく、歴史学や政治学で同様な取り組みもみられる。

また、方法論が異なるといえども、紛争を同時代的に取り組むという意味では、日々報道されるメディア媒体のデータやジャーナリストなどによってものされた書籍の存在を無視することの方が難しいといえよう。さらにこの論点を推し進めると、情報技術のグローバル化に伴い情報の伝達速度や伝達範囲が文字通り地球規模になった世界において紛争を考えることの在り方は問われてよい。

その意味でかねてより懸案としていたのが、民族誌的データとメディアを通じた情報の違いを、分析の場においていかに折り合いをつけるのかということである。時事問題をいかに人類学に取り込むかという視点から、自身の創案による時事人類学の試みを紹介した綾部真雄（首都大学東京）の発表は、先に述べた問題関心をもつ者からみて興味深いものであった（綾部真雄「時事人類学の試み——タイ政変の輪郭を点描する」）。紙幅の関係で細かな紹介はできないが、本研究会の枠に留まらず人類学一般の今後の方向性を検討する上でも重要な論点を呈示している。

2011年度は、それ以外の発表としてはオセアニアの紛争を

論じるときには看過できない、紛争の中心地とされるメラネシアの事例を取り上げた。以下、パプアニューギニア、ソロモン諸島、フィジーの事例の順番にみていきたい。

## メラネシア問題1：パプアニューギニア

メラネシアのパプアニューギニアは、オセアニアの政治的不安定化（アフリカ化と称する研究者もいる）の議論では中心地とされる地域である。2011年度は、パプアニューギニア高地、島嶼部、都市問題と現代政治の3つにわけて検討した。

まず、パプアニューギニアの高地において、いまにいたるも継続しているクラン間紛争についての発表があった。同地は、毎年数百人レベルで死者がでていられることもあるほど、クラン（ひろい意味での部族に相当）間の争いが頻発する社会であるし、人類学の議論においても紛争の絶えない社会としてしばしば取り上げられる地域である。

興味深いことに、パプアニューギニア高地は、社会的慣習として、敵対するクランとも姻族を通じて結びつきをもつ（敵対クランと女性の交換を行なっている）という複雑な社会関係を維持している。深川宏樹（筑波大学）は、フィールドワークにもとづく事例分析から、日常的な争いが拡大するさいに歯止めとして働く姻族関係者（対立する集団の仲介者となる）の存在を指摘する。そして、姻族による仲裁の効力がかなり限定的となるクランの枠をこえた争いは、概して拡大していく傾向があると分析している（深川宏樹「ニューギニア高地における争いの拡大の論理——クラン間の敵対関係と友好関係の並存」）。

島嶼部からは、オセアニアの政治的問題としてもっとも知られるブーゲンヴィルにおける武力紛争が取り上げられた。1980年代後半、鉱山開発の利権をめぐる、ブーゲンヴィルと中央政府の関係は悪化の一途をたどり、その結果として、1990年代の抗争によって1万人以上の犠牲者をだす惨事となった。

その後、2000年前後の停戦、和平合意を通じて相対的な平和状態にあるが、宮澤優子（インテック・ジャパン）は、紛争と平和構築のあいだで振幅の激しい状況にあるブーゲンヴィルのいまを、紛争状況下で幼年時を過ごした若者へのインタビューを通じて描いている（宮澤優子「ブーゲンヴィル——10年内戦と若者たち」）。

そして最後に、パプアニューギニアの都市部の問題が取り上げられた。発表では主として国内政治の動向に焦点が当てられた。当初は選挙制度の変遷の分析を通じてパプアニュー

ギニア史について議論することが予定されていたが、国際協力機構のパプアニューギニア事務所勤務している岩本洋光は、2つの内閣、2つの首相、2つの総督が並立するという史上かつてない異常事態を目の当たりにしたことから、同時代的な歴史記述を試みた(岩本洋光「パプアニューギニアの現代政治への考察 2007年~2012年」)。冒頭の時事人類学でも触れたように、同時代的出来事と対峙しながらいかに分析を行うかは、本研究のようなテーマに取り組む上でついでに回る課題であろう。



エンガ州での補償支払い時の儀礼(2006年8月、パプアニューギニア、深川宏樹撮影)。

## メラネシア問題2：島嶼部の諸問題

パプアニューギニアと並びオセアニアの紛争という視点から議論したときにはすせないのが、メラネシア地域の政治的諸問題である。今年度は、メラネシアの政治的問題の中心地である、フィジーとソロモン諸島の事例が分析された。

筆者は、フィジーのクーデタは先住系フィジー人と移民のインド人とのあいだの紛争として焦点化される傾向がある中で、フィジー人内部の政治的対立という視角から分析を試みた。事例としては、1987年5月からはじまり、数え方にもよるが4度に及ぶクーデタの歴史の中で、つねにエスニックな政治的権利の要求と同時に唱えられるフィジー西部地方という単位における政治的権利の主張について整理すると同時にその背後にあるロジックについて分析した(丹羽典生「統合と分裂のはざま—フィジー西部地方の分離独立問題」)。

同じフィジーの政治的問題に対して小柏葉子(広島大学)は、オセアニアの地域機構である太平洋諸島フォーラムによる対応の変化を、国際関係論の立場から分析している。フィジー一国の政治的動きが地域機構のありよういかに影響を与えているのか、その歴史的経緯を含めて明らかにした。とくに2006年のクーデタ以降の動きとして、太平洋諸島フォーラムから追放された後に、独自の地域機構を設立しようとする、ある意味でフィジーの独尊的な振る舞いについては、オセアニアでも例外的ではないかと質疑応答の場で議論となった(小柏葉子「フィジー紛争をめぐる地域的安全保障協力—太平洋諸島フォーラムにおける求心力と遠心力の動態」)。

ソロモン諸島の紛争については、2名の発表がなされた。石森大知(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)と藤井真一(大阪大学)は、ソロモン諸島の首都ホニアラ近郊をおもな舞台に、首都の位置するガダルカナル島民とマライタ島民とのあいだに起きた武力紛争を事例に、メラネシアの政治的問題を分析している。この事件は、一般的に「民族紛争(Ethnic Tension)」とよばれ、1998年から2003年に

けて起きた。多数の死者や怪我人のほか、ガダルカナル島住民の人口の約3分の1に相当する国内避難民を生み出した。

藤井は、紛争後に行われている平和構築活動の一環としての真実和解委員会の活動について着目している。被害者の語りの多様性を生かすつつ厚みをもった紛争の記述を生み出せるか試行している(藤井真一『『エスニック・テンション』とは何であったのか—ソロモン諸島における民族

間関係を理解するために)。

それに対して石森は、紛争の激戦地とされた東タシンボコの人びとへのインタビューを通じて興味深いエピソードを拾い出している。それは、紛争への戦闘参加を楽しみにする若者の姿であったり、対立する民族間の融和的な関係が持続していた側面や、紛争時の伝統的慣習を復興させようとする取り組みなどである。2003年の紛争の暫定的収束を経た後の現時点における、さらに生き残った人びとに対するインタビューの結果という限定をつけたとしても、以上のような民族誌的細部の記述を通じて、多元的に構成された現実の一端を明らかにすることに成功している(石森大知「『民族紛争』とカスタム復興—ガダルカナル島北東部の人びとの経験」)。

## オセアニアとく紛争

2011年度までの研究会を通じてオセアニアにおけるく紛争>に関係する主要な地域について、ニューカレドニアを例外として、概ねカバーすることができた。

冷戦以降、グローバル化を経て政治的不安定化にさらされるオセアニアという視角から、メラネシアを中心にひろくオセアニア諸社会の事例の検討を重ねてきた。筆者は、研究会の冒頭で、そうした楽園としてのオセアニア像に反する出来事が立て続けに起きた状況を現地人知識人たちの表現に倣い「イノセンスの終焉」と形容した。これまでの共同研究での蓄積を通じて、オセアニアにおけるく紛争>のありようについて、いささかなりとも迫っていきたいと考えている。



2000年クーデタの指導者のメディアインタビュー(2000年、フィジー、イオワネ・ブレセ撮影)。

### にわのりお

民族文化研究部准教授。専門は社会人類学、オセアニア地域研究。著書に『脱伝統としての開発：フィジー・ラミ運動の歴史人類学』(明石書店 2009年)、論文に「紛争と政治的混乱：アフリカ化論の批判的検討を通じて」(日本オセアニア学会編『オセアニア学』京都大学学術出版会 2009年)、「Leaving their tradition behind: Development of the Lami movement in Fiji from 1949 to the 1990s」(*People and Culture in Oceania* 26, 2010)など。